JIJI PRESS 時事通信社

コメントライナー

第6784号　　2019年8月19日（月）

◎笑顔のシンデレラに学ぶプロ意識

言の葉OFFICEかのん代表　川邊　暁美

◆おおらかで自然体

全英女子オープンで優勝し、日本選手として42年ぶりのメジャー制覇を果たしたプロゴルファー渋野日向子選手は、プレッシャーの掛かる中でも笑顔を絶やさず、海外メディアは「スマイリング・シンデレラ」と呼んだ。

男女通じて史上2人目の快挙達成にも、「やっちゃいましたね～、驚きすぎて涙も出なかったです」と自然体で答える20歳。プレーの合間におやつを食べる大らかさも話題を集めた。そう言えば、平昌冬季五輪で銅メダルを獲得した女子カーリングチームも、ハーフタイムに果物やお菓子をほおばる「もぐもぐタイム」が自分たちらしさを失わずにプレーするための大事なルーティーンのようで印象的だった。

◆見る人を気持ちよく

ただ、渋野選手のエピソードで最も心を打たれたのは、とびきりの笑顔やリラックスした振る舞いは自分を重圧から解き放つためだけでなく、「見ている人を楽しい気持ちにさせるため」でもある、ということだ。かつて試合中に苛立ちを隠せない娘に、父が「ゴルフは見せる競技。見ている人を嫌な感じにさせてはいけない」と諭したという。

ギャラリーとのハイタッチやテレビカメラに手を振るなども、見ている人に一緒に楽しんでほしいというプロ意識からの言動だったと知り、「イマドキのアスリートは重圧を感じないのか、あっけらかんとしているなぁ」と、平成育ちと昭和人間との精神構造の違いで片付けそうになった自分を恥じた。

◆周りは眼中にある？

誰でも、それぞれの活動の場で「自分らしさ」を発揮し、自分の望む成果を出せたら、それは大変満足できることだろう。だが、そこに「周りの人のために、自分はどうすべきか」という視点が入っているかと問われたらどうだろうか。

たとえば、ささいなことだが「一緒に働く人に配慮しているか」。気持ちよく挨拶しているか、職場の机の上が散らかっていて周囲に迷惑をかけていないか。あるいは「お客様の立場になって応対できているか」。自分が説明しやすい言葉で、話しやすい順序でまくし立てていないだろうか。仕事以外でも「公共の場で周りに不快な思いをさせていないか」。スマホを操作しながら荷物が席を塞いでいるのに気づかないなどマナー違反をしていないだろうか・・・・・。

最高のパフォーマンスに繋がる「自分らしさ」とは、周りが見えない「自分勝手」「利己主義」ではなく、自分を一歩引いたところで客観的に捉えた上で、自分がその場ですべきことを、自分の出来うる最高の水準で実践するべく努力することではないかと、プロテストに合格してわずか1年という渋野選手のプロ意識に教えられたように思う。

（かわべ・あけみ）

◆監修◆ 内外情勢調査会　　◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8　TEL：03-6800-1111（代表）

この記事に関する問い合わせは、時事総研（03-3546-2384）まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003